

# 1911年英領マラヤ下センサスにおけるクダー（Kedah）像

黒田 景子

## はじめに

20世紀以前の東南アジアにおいて住民状況を把握するための人口調査は困難を極めた。特に、植民地化を受けなかったシャムの行政区分やセンサスは独自のもので、19世紀のモントン制では地方の特性はいわば隠されていた。そのシャムの領内とみなされていたマレー半島部のイスラーム港市の状況については、これらが英領マラヤの非連合州として英国に委譲されるまで、数値的な特徴はつかみづらかった。

本稿では著者が長年調査対象とする、現マレーシアのクダー州を中心に、旧クダー国のうち英領マラヤとなったクダー州、プルリス州について、1909年の Anglo-Siamese Treaty の後、1911年に英国によって実施されたセンサスを分析し、その歴史地理的な特徴を数値的な面で読み取することを目的とする。

センサスとは対象地域を統治基礎データとして広く把握するものである。しかしそれと同時に、調査内容の定義によって、「民族」を公的に固定するものでもあり、また、「調査対象としない」項目については、政治的理由で意図的なものである等、当時の国際情勢を反映している。現在の世界の国勢調査は国連が作った基準に沿ったものが作成されるようになってきているが、陸地国境を接するいわゆる境域については、やはり現在もなおそれぞれの政治的理由により、公開されない部分もある。

英領マラヤは1939年-1945年の日本占領期に、クダー、クランタン、トレンガヌの各州が一時、タイ国（シャム）に「返還」された。その後各州は英領マラヤに復帰し、1959年にマレーシアとして独立以降、多民族国家としてマレー人、華人、インド人の3民族の融和と共存をはかっている。しかし、公開されている独立後のセンサスにおいては、民族分類は「Malay, Chinese, Indian, Others」の4分類のみである。さらにイスラームを国教とし、華人とインド系以外の先住民族を「ブミプトラ（土地の子）」として経済、教育による優遇策を取ってきた結果、マレー半島部の「ブミプトラ」とボルネオの「ブミプトラ」諸民族については、その扱いや人口把握状況は、極めて政治的な配慮を必要とするものになってしまった。クダーにおいても「Sakai」と呼ばれてきたプロトマレー系住民は差別的呼称であるとしてオランアスリ（Orang Asli）に統一されている。

本稿で扱うクダー州についても、現在通常に行われる国勢調査ではその歴史的特徴を記す項目は質問されなくなっている。クダーは、シャムとの数百年の関係による一種の独自性が見られるが、数値的にそれを追えることが可能で、さらに信頼性における最も古いセンサスは1911

年の英国ペナン政庁によるものしかないと考えられる。

1909年まで、クダーとプルリスは朝貢国（prathetsarat）としてシャムに属していた。シャムのマレー半島部朝貢国はいずれもマレー系住民によるムスリム優勢地域である。シャムの朝貢国としての歴史は、イスラーム化とほぼ同時期の15世紀以降と言われている。また、マレー語話者マレームスリム人口が人口の8割を占める旧パタニ王国がシャム領内にのこったが、クダー王国は19世紀の政争により分割され、サトゥーンがシャムに、プルリスはクダーから別の州としてマレーシアにのこる。クダーとプルリスの特徴として、「シャム語」話者ムスリム（サムサム：Samsam）と上座仏教徒のシャム人（Malaysian Siamese）の存在があるが、サムサムのマレームスリムへの同化と、ブミプトラであるシャム人の過去の人口や村落分布について数的把握が出来るのも、この1911年のセンサスが有効である。

クダーに関する20世紀初めのセンサスはグラバウスキー（Grabowsky）が考察を加えたシャム国の1904年のセンサスの研究があるが、地域行政区分が大きく、地域の性格についてはあまり精密な情報は読み取れない。

その点において1911年の英国によるセンサスはより細かい民族や言語についての情報から思いがけない地域の姿を数値的に現すことができる。文献資料が少なく、村落の口伝情報に頼らざるを得ない地域の歴史について、数値的根拠となりうるセンサスの意味は大きい。

## 1. 1909年の Anglo=Siam Treaty について

シャムと英国とのマレー半島部における諸国の所属と国境の設定については、1909年3月10日に締結された Anglo=Siam Treaty に依る。

第一条では

「第1条

シャム政府は、クランタン、トレンガヌ、クダー、プルリス、および隣接する諸島に所持している財産権、保護、管理、支配権を英国政府に移譲する。これらの領域のフロンティアは、本書に添付されている境界協定によって定義される。」

と記され、クランタン、トレンガヌ、クダー、プルリスは英領マラヤの非連合州（Non-Federated States）となった。

また、この条約での国境の設定については、条約中に以下のように記されている。

シャムの王陛下の領土と現在の条約によって守られていた領土が、英国とアイルランドの王である陛下に引き渡された領域は次のとおりである：

プルリス（Perlis）川の河口の北岸の最も海の端から始まり、一方ではプルリス川と（プジョ）Pujoh 川との間の流域である丘陵の範囲に北から始まる。その丘の範囲で形成された

流域に沿って、それが主要な流域に達するか、片側でシャム湾に流れ込む川と他の側でインド洋に流れ込む川の境界線に分かれる。この主要流域に沿って、スンガイ・パタニ (Sungei Patani)、スンガイ・トゥルビン (Sungei Telubin) およびスンガイ・ペラ (Sungei Perak) の源流 (Sungai は川の意味)、スンガイ・プルガウ (Sungei Pergau) の源流地点として、主流の流域を離れ、スンガイ・トゥルビンからスンガイ・プルガウの海域を隔てる流域に沿って、スンガイ・ゴロ (Sungei Golok) の主流であるブキット・ジエリ (Bukit Jeli) の源流となる丘陵に行く。そこからフロンティアは、クアラタバルという場所で、スンガイ・ゴロの海の岸壁を通る。

この国境線は、スンガイ・パタニ、スンガイ・トゥルビン、スンガイ・タンジュン・マスの谷と、スンガイ・ゴロクの左岸または西岸、シャムの谷、ペラク川の全溪谷と右岸または東岸の溪谷スンガイ・ゴロクから英国領までである。

双方の臣民は、スンガイ・ゴロクの水域とその豊かな水域を航行することができる。

プラウ・ランカウイ (Pulau Langkawi) と呼ばれる島は、タルタオ (Tarutau) とランカウイの中間の南の島々の中間点で国境が引かれ、ランカウイの南のすべての島と共に英国となる。タルタオと中流部の北部の島はシャムに残る。

西海岸に近い島に関しては、プルリス川の北岸の最も海岸に近い点が海に接する緯度の平行線の北に広がる地域の人々はシャムにとどまり、それに並行する南部は英国領になる。

クランタンとトレンガヌの東部に隣接するすべての島々は、スンガイ・ゴロがクアラ・タバル (Kuala Tabar) と呼ばれる場所で海岸に到達する地点から引かれた緯度と平行して英国領となり、そのすべての島々の北部に並行する地域はシャムに残る。

(中略)

上記の境界は、ブリテン王国政府とシャム政府の両方によって、最終的なものとみなされるべきであり、これらの境界は、国家または州の既存の境界の変更そのように影響を受けた州または州が行った変更の理由による補償請求は、いずれかの当事者によって扱われ、サポートされるものとする。[Siam Treaty with Great Britain :Fle no.10883/32-38]

この条約による国境設定は川筋に沿った自然条件を主としてマレー半島中部を横断するものであった。しかし、第一条の規定ではシャムが朝貢国として領内としてきたマレー系諸国のうち、旧パタニ王国領とクダーの一部であったサトゥーン県についてはシャム領となった。条約には旧パタニ王国領とサトゥーンについては一切の記述がない。

## 2. シャムにおける人口調査

20世紀以前の人口調査については、シャムにおいてもシャムに滞在していた西欧人による推定値が存在するが、近代的な基準から見れば、比較の対象にはならない。

シャム・ラタナコーシン朝初期の人口調査は地方の場合徴用や徴兵のための調査で、いわゆる「Sak」、つまり「入れ墨登録」、と言われるもので行われていた。すなわち、18才から60才までの男性に対して、腕に登録した場所と年号を簡単な入れ墨として記すものである。人は移動するものであるから、同じ人物が数年後に違う地域で登録される場合には他の場所に再び入れ墨をするわけである。この方法では、正丁（phrai）のみを登録するので、女性、寺院や貴族の「私民」、「奴隷(that)」や、山岳少数民族、戦乱避難民、などは数に入らなかった。

20世紀のタイの最初の全国的な国勢調査は、1909/10年に1910/11年と1911/12年に出版された改訂版とともに実施公開された。しかし、1919年の国勢調査だけが現代の国際基準と一致した。追加の国勢調査は1929年、1937年および1947年に実施された [Grabowsky 1996: 49]。

グラバウスキーは1910年以降の調査には「すべてのタイ国民を『民族宗教』という旗の下で結集させる」ことを目的としたラーマ6世の意向が反映されており、ナショナリズムによる民族統一という意味から、不完全なものともみなし、むしろ、それ以前の1904年のシャムの国勢調査に、1899年から1909年の間に行われた州の国勢調査からの追加データを収集し、それを補正した上で1904年の調査を補う試みをしている。とはいえ、当時の調査は、シャム全国を12のモントン（monthon）と呼ばれる行政区分に分けて調査されたもので、クダーやパタニを含むマレー諸国の特徴はいささか曖昧なものになった。

すなわち、モントン・ナコンシータマラートの中に現在のナコンシータマラート県、パタルン県、ソンクラ県、パタニ県、ヤラー県、ナラティワート県が含まれ、マレー人人口や宗教施設、宗教指導者などの数もモントン単位で数えられたため、現実にマレー人ムスリムで日常語をマレー語としている旧パタニ王国の状況を抽出することは難しい。

それは本稿で扱うモントン・サイブリー（シャムではクダーは Saiburi と呼ばれる）についても同様で、このモントンにはクダーとプルリスの他、サトゥーンが含まれていたが、クダー、クランタン、トレンガヌについては1909年に英領に委譲されるために1904年のセンサスの対象にはならなかった。グラバウスキーの補正によれば、モントン・サイブリー（クダー、プルリス、サトゥーン）の1904年の人口は219,000人となる。また、モントン・サイブリーに属するサトゥーンはパタニとともにシャム領に残留したが、グラバウスキーはモントン・プーケットの状況と合わせると、1904年当時はプーケット島の人口の5分の1がマレー人とされていたと計算する。

グラバウスキーは1996年現在ではパタルン県やクラビ県においてマレー語話者が少なく、先祖の言葉を忘れてタイ語を話しているとするが、筆者はこれについては異なった見解を有しているので後述する。

1904年のシャムの国勢調査においては民族（チャート、ชาติ）の分類もまた悩ましい問題であった。民族とは公的に分類されることで成立するというものでもあり、シャムにおける華人

は事実上服装や見かけで分類されたのではないかと述べられている。

### 3. クダー・プルリスのセンサスの調査方法

1911年のセンサスとは「Report on the Census of Kedah and Perlis, A.H. 1329 (A.D. 1911)」であるが、この調査では英国はインド統治の経験から編みだした調査方法をとった。

英国はセンサスを実施するにあたって、まず調査があることをモスクなど民衆が情報を得る場所で予告し、調査に協力しない場合は罰金もあり得ると警告した。調査をする地区の地図をムキム (Mukim : 村落の上の行政単位、Daerah = 郡よりは小さい) 単位で作成し、そのムキム委員が担当し、また他のムキム委員にやり方を教えるという方法である。センサス委員会がつくられて、大体の担当数を把握した。

その上で、インドで成功した方法「Indian Slip System」を採用した。センサス調査では重複や抜け落ちがありがちなものであるが、この方法はまず調査対象の家に番号を刻印したナンバー銅板をつけ、その上で、2月27日から3月7日の間にスケジュールの調整と訂正をした。調査委員会は地区の土地管理官、警官、森林管理官、港湾局など、殆どがマレー人からなる。マレームスリムが人口の大半を占めることがある程度予想がついていたため、モスクでの公告によって、調査対象日には不在にしている家は殆ど無かったとしている。

その上で、移動する河川や道路などでは3月1日の午前2時から12時間の間に警察官や港湾局などの調査担当が巡回してカウントした。重複を避けるため、既に調査を受けた人間には署名したチケットが与えられた。さらに、オランアスリ (センサスでは Sakai) の人々のためには、調査に先立って、塩やタバコなどの贈り物を用意したので、マレー人調査員に対して彼らは協力的であったという。

調査票の集計委員にはペナンの事務官の他、行政書士、英語学校教師、など40名が調査スタッフとして雇われた。

「Indianslip System」の実務とは以下のようなものである。調査員は色分けされた用紙と鉛筆をもって調査に回るが、この場合、マレー人 (広義の意味でのマレー人、サムサム、アチェ人などを含む) は白紙、華人はピンク紙、インド人は赤色紙、シャム人は黄色紙、その他は青色の用紙が使われた。女性を記す場合には左の角をカットして記した。

調査の内容は、分類のための地区ナンバーとスケジュール上の順番を示した上、鉛筆で

- 1, 年齢
- 2, 職業
- 3, 民族
- 4, 言語
- 5, 宗教

6, 出生地

7, 結婚の有無

を簡単な符号で示したものであった。

用紙を回収した後、ペナンから呼び寄せた事務スタッフ達が、この用紙のソート作業、まとめて入力する作業に入り、報告書の印刷を除き、すべてが5月16日までに終了した。ペナン政府はセンサスの遺漏の少なさと信頼性を誇っている。

#### 4. センサス分析

ここでは、クダーの特徴であるシャムとの関係に注目して抽出した分析を試みる。民族と言語と宗教の状況を見る。

##### 4-1. 民族

Race	Kedah	Perlis	Total
Malays	195411	29497	224908
Chinese	33746	1627	35373
Siamese	8135	1388	9523
Indians	6074	114	6188
Other Races	2620	120	2740
Total	245986	32746	278732

Table 1. The Race in Kedah & Perlis

これによれば、クダーの全人口の81%がマレー人、13%が華人、3%がシャム人、2%がインド人、1%がその他となる。圧倒的にマレー人が優越する世界であり、しかも、インド系住民はシャム人よりも少ないという特徴がある。

##### 4-2. マレー人の狭義分類の存在

このセンサスで興味深いのはマレー人を Sub Race に分けていることである。

この分類はその後のセンサスには見られないもので、クダーとプルリスにおいては、広義のマレー人と分類される人々の中に、サムサム (Samsam) という分類が見られることが特徴である。

Malay: Subrace	Kedah	Perlis	Total
Malays	180694	17837	208531
Samsams	14717	1660	16377
Achinese	908	1	909
Banjarese	117	2	119
Boyanese	33	1	34
Bugis	16	...	16
Total	196485	29501	225986
Jawipekans*	396	54	450



Javanese	716	43	759
Sakais**	105	...	105
Total	1217	97	1314
G.Total	197702	29598	227300
Table 2. マレー人（広義）の人口内訳			

\*Jawi pekan, Jawi peranakan はインド系ムスリムとマレー人の婚姻により生まれた人々である。主にペナンで商業に就いていた。

\*\*Sakai は Semang などのオランアスリを指すが原文ママとした。

サムサムという民族呼称が、英国資料に登場するのは1822年のクラウファードのミッションが初出であろう [Crawfurd 1822: 29]。サムサムとは日常において「シヤム語」をはなしているムスリムである。アルシャンボーはサムサムには Samsam Melayu と Samsam Siam がいると分類していたが [Archanboulton 1957]、このセンサスでは、マレームスリムとしてのサムサムが多い。センサスではクダールのマレー人人口の92%がマレー語話者のマレー人だが、サムサムは7%に過ぎないとはいえ、他のマレー系民族より多い。

### 4-3 使用言語状況

4-3-1. マレー語話者の民族別分析では、Table.3のような状況になった。

Race	Kedah	Perlis	Total
Malays	180694	27837	208531
Siamese	60	3	63
Chinese	43	1	44
Indians	76	3	79
Achinese	43	...	43
Africans	15	3	18
Arabs	102	3	105
Banjarese	100	...	100
Boyanese	2	...	2
Bugis	8	...	8
Cingalese	6	...	6
Eurasians	11	...	11
Javanese	154	8	162
Jawipekans	387	51	438
	181701	27906	209607
Table 3. The Race Speaking Malays			

マレー語話者にマレー人の他 Jawi Pekans が多いのは、彼らがムスリムであり、文化的にムスリム社会の一員であるからだろう。

4-3-2. シヤム語話者の民族別分析では、Table.4のような状況になった。

Race	Kedah	Perlis	total
Siamese	8032	1383	9415
Samsams	14717	1659	16375
Chinese	580	14	594
Javanese	2	0	2
total	23331	3056	26387

Table 4. The Race Speaking Siamese

ここでいう「シヤム語」とは現在の標準タイ語とイコールではない。タイ南部で現在も話されているタイ語の南タイ方言に類似するものである。しかも、サムサムの場合には、基本文の中にマレー語のクダー方言なども混じるため、「SamSam」=混ざった言葉を話す人々、という理解もある。近年ではタイ国のタイ語と区別して「シヤム語」「シヤム人」という呼称がマレーシアで使われている。後述するが彼らは近年に南タイから移住してきた人々ではない。

1911年当時のシヤム語話者ではシヤム人よりサムサムのほうが多いという結果がでている。サムサムはシヤム語話者の63%、シヤム人は34%、華人は3%である。

「サムサム」という呼称を当人たちは好まない傾向があることが後年の調査でわかっている。サムサム達の集落は本稿著者が1991年におこなった調査では、クダーの北部と内陸中部に村落が分布していて英語やマレー語の理解は進んでいたが、1911年当時では全くマレー語が理解できないと記されている。

現在では英領マラヤ時代の英語教育とその後のマレー語教育で彼らの大半はマルチリンガルになっている。主流ではない言語が標準国語教育によって失われつつある傾向の典型例である。

#### 4-4. 宗教状況

次にクダー、プルリスの宗教状況について述べる。

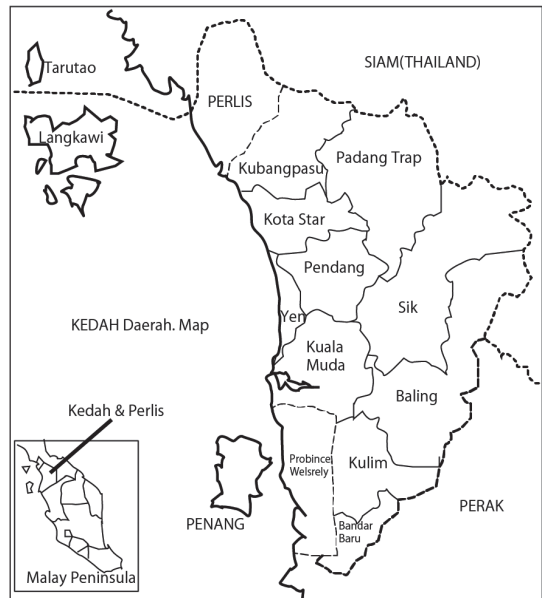
##### 4-4-1. 「イスラーム教」人口

マレー人が圧倒的に多く、ムスリム人口の割合が多いのはあらかじめ予想がつくが、注目すべきはサムサムと答えた人々の99%がムスリムであると答えていることである。つまり殆どが Samsam Melayu である。



	Kedah	Perlis
malays	180693	27836
Samsams	14701	1635
Chinese	71	4
Indians	755	68
European	1	1
Siamese	181	7
Cingalese	6	...
Jawipekans	396	54
Bugis	16	...
Africans	15	3
Arabs	119	10
Javanese	704	43
Boyanesse	33	1
Achinese	908	1
Banjarese	117	2
Eurasians	4	...
Total	198720	29665

Table 5. Religions, Kedah and Perlis-Islam



Map. 1 Kedah の Daerah (郡)

#### 4-4-2. 「シャム宗教」人口

では宗教について「シャム」と分類された人々はどうか。

	Kedah	Perlis
Samsams	16	24
Chinese	12	1
Siamese	7874	

Table. 6 Religions, Kedah and Perlis-Siamese

ここでいう宗教としての「シャム」は上座仏教徒を指す。クダーには上座仏教寺院が2018年現在で42あり、マレーシアの上座仏教徒地域としてすでに知られている東海岸のクランタンよりも多い。しかし、1911年時の調査者がシャム人の殆どが「上座仏教徒」を表す「シャム」と記したのに対し、後にでてくる宗教施設としての華人廟などどう区別したかが不明である。

#### 4-5. 地域 Mukim レベルの民族分布

クダーの行政単位としては、村 (Kampung) の上に、ムキム (Mukim)、さらにその上に郡に当たるダエラ (Daerah) がある。センサスではムキムでとりまとめたものを郡 (Daerah) 単位での民族構成が公表されている。

ただし、原本では州都アロースターを含むコタ・スター (Kota Star) が現在のプンダン (Pendang) 郡をも含んでいるため、ムキム単位の数値で補正を行った。また、ムキムの民族

別では Samsam もマレー人としてカウントされているため、居住地の分類は不可能であった。

Daerah	Malay. Samsam	Chinese	Siamese	Indian	Others	TOTAL
Kota Star	70900	8092	844	1003		81414
Pendang	11952	708	1876	6		14543
Pdg. Trap	9582	867	1788	0		11485
Kubang Pasu	25106	840	960	423	65	27394
P.Langkawi	7466	856	44	104	304	8774
Yen	12619	751	64	53	545	14032
Kuala Muda	21647	9180	356	1781	403	11782
Baling	21864	1269	2047	112	229	25521
Kulim	8715	8761	151	1981	329	19937
Krian	5550	3174	5	611	167	9507
TOTAL	195411	33746	8153	6074	2620	245986

Table 7. 各 Daerah における民族の割合

スルタンの居住地や商業地区の中心であるコタ・スターに対し、プンダン内陸のムダ川地域を含む農村部である。

この Table 7. からわかることは、まず、プンダンとパダン・トラップ (Padang Trap)、バリ (Baling) といった内陸から山岳部におけるシャム人人口の多さである。さらに華人についても首都アロースターよりも、クアラムダ (Kuala Muda)、クリム (Kulim) などクダの南部、ペナン領域に近いところに集中している。

クラウファードはムキムの数を142と述べていたが、1911年には151になっている。さらに調査者の報告によれば、バリではムキムが非常に広く、山岳地域を含んでいるので、後に示すムキム単位の分布図での人口密度 Map には注意する必要がある。

#### 4 - 6. 出生地

クダ州のみのデータになるが、出生地調査では以下の結果になる。

Daerah	Kedah	Perlis	Kelantan	Singgara	Setul	Patani	Siam
Kota Star	3249	14	0	271	3	98	101
Padang Trap	567	0	0	6	3	187	1
Kubang Pasu	346	36	0	487	0	54	35
P.Langkawi	13	2	0	3	5	1	18
Yen	47	0	0	4	0	1	12
Kuala Muda	225	0	0	8	1	18	73
Baling	1892	0	1	27	0	96	16
Kulim	82	0	0	11	1	1	29
Kulian	1	0	0	0	0	1	1
TOTAL	6422	52	1	817	10	457	286

Table 8. Birth Place Siamese in Kedah

すなわち、80%の住人がクダール出身と答えている。その他の地域を出身とする中では、コタ・スターとクバンパス（KubangPasu）の居住者でシャムのソングラー（Singgara=Songkhla）と回答したものが突出する。ソングラーとコタ・スターの中心アロースター間にはサイブリー街道として知られる半島横断路があり、交易路であると同時に、クダールからシャムへ朝貢品の金銀樹と貢物を運ぶ交易路である。この道路沿いには「シャム語」話者のサムサム集落が多いことが1991年の調査でも確認されており、人々は日常的に越境してソングラーのマレー人居住地（サダオ Sadao やパトン・カーラム Patong Karam）に冠婚葬祭に出かけている。パダン・トラップにはパタニ出身者が若干多いが、山越えをしてパタニに至る古い交易路が存在していた。稲作農民の季節労働者（稲刈り作業）などの短期ビザによる滞在者は1960年代に見られる。むしろクランタン出身者がほぼ0であることやプルリスに接するサトゥーン出身者の少ないことが意外ではある。

#### 4-7. 宗教施設（モスクと寺）

宗教施設については以下のようなデータになっている。宗教施設の調査としてはこれには問題がある。

Daerah	Kedah	Masjit	Temple
1	Kota star	101	9
2	Pendang	11	...
3	Padang Trap	6	...
4	Kubang Pasu	29	1
5	P.Langkawi	9	1
6	Yen	17	...
7	Kuala Muda	25	4
8	Baling	21	1
9	Kulim	17	3
10	Krian	12	1
	TOTAL	248	20

宗教施設	Perlis	Masjit	Temple
		47	1

Table 9. Masjit and Temple

まず、宗教施設でまず、モスク（Masjit）とはもっと小規模のスラウ（Sulau）を含んでいるのか否かがはっきりしない。モスクは大きさによって、受け入れムスリム数が決まっているので、はじめはスラウ（礼拝所）その後は人口増加によって小さなスラウがモスクとして新造されていく。

さらに寺 (Temple) は、シャム人の上座仏教寺院、華人の祠、なども考えられるが、華人廟が上座仏教寺院内に併設されることもあり、どういう基準で数えられたのかがはっきりしない。

クダーがシャム所属時の史料として、1890年と1892年にクダーの上座仏教寺院とそこに所属する僧侶数のリストが存在しているが、それによれば14の上座仏教寺院とそこに所属する僧 (sami) の数の記録がある。[Kepada Phaya Pering Fasal Hantar Lis Banci Sami-sami Di Kedah Ini in Surat Menyurat Sultan Abdul Hamid No.2]

1308年 (イスラム暦) = 1890		
Mukim 名	上座仏教寺院、通称名	僧侶数
1. Padang Kerbau	Watt Kura	7
2. Padang Kerbau	Watt Padang Peliang	14
3. Padang Kerbau	Wat titi Akar	6
4. Padang Kerbau	Watt Padang Kerbau	1
5. Padang Kerbau	Watt titi Akar juga	6
6. Padang Kerbau	Watt Bendang	3
7. Mukim Rambai	Watt Lampam	4
8. Mukim Tekai	Watt Teluk Kela	5
9. Tekai	Wat Lamdin	22
10. Baling	Wat Baling	6
11. Teloi	Wat Dalam	1
12. Teloi	Wat Lengkuas	4
13. Teming	Wat Hoku	6
14. Teming	Wat Ceruk Padang	2
Table 10. 1890, 92年タイ寺院史料		

これらの寺院は2018年の現在も存在している。なおムキム・パダン・クルバウ (Mukim Padang Kerbau) に集中しているのは、この地域のシャム人村落の集中をも意味する。パタン・クルバウは「シャム語」名 Thung Khwai の名も持つ。また Wat Lamdin は伝によればクダーの寺では最も古く、500年前の建立と伝わる [黒田 2011]。

Wat kura では住民が近年寺の来歴について石碑をたて、それによるとこの寺の場合は300年を越えると記されていた。

タイでは、上座仏教の僧侶は食物を托鉢のために歩き回って得るが、マレーシアのクダー州の人口の少ない奥地のシャム人村落では寺に村民が食事を持ってきたり、あるいは寺の中に台所があり村民が食事を作る。また寺を造って僧侶を迎えるようになるまでに若干の年数が必要なので、村落の起源はさらに古いとみるのが自然である。

#### 4-8. 職業

職業についてのデータをダエラ別に職業をマレー語話者マレー人、サムサム、シャム人と分類すると次のような表 (Table11.12.13) になる。

	kotastar	Padang trap	Kubang Pasu	P.Langkawi	Yen	Kuala Muda	Baling	Kulim	Krian	Perlis
舞踊楽人等	27	2	30	...	12	53	30	25	8	12
政府職員	228	6	37	32	36	62	47	46	25	43
モスクの役人	112	12	43	3	15	38	16	9	11	15
Punghulus(首長)	38	7	13	5	9	16	9	13	9	15
警官	74	4	29	11	17	92	11	48	35	40
宗教教師	42	...	9	4	1	19	2	7	...	10
学生	444	...	92	89	141	158	...	286	14	142
校長	19	...	4	1	3	2	...	9	1	6
商店主	108	13	13	12	18	58	60	33	16	76
牛車貨物	5	...	10	...	...	61	4	163	22	17
象使い	2	...	1	...	...	...	6	...	...	2
漁師	603	...	3	152	62	294	1	2	8	283
日雇い労働	164	...	126	16	26	476	217	463	208	111
米作農業	38924	4061	11458	3294	6320	8068	11663	2497	1837	15774
ゴム農家	11	...	1	...	24	4	2	9	3	6

Table 11. 1911の Malayspeaking Malays の職業センサス

	kotastar	Padang trap	Kubang Pasu	P.Langkawi	Yen	Kuala Muda	Baling	Kulim	Krian	Perlis
舞踊楽人等	5	...	...	...	4	...	...	...	...	...
政府職員	1	...	1	...	...	...	...	..	...	4
モスクの役人	13	...	15	...	...	...	...	..	...	...
Punghulus(首長)	6		4							1
警官	3	1								
宗教教師	1		1							
学生	2		8							
校長										
商店主	25		2							1
牛車貨物										
象使い	5		2							
漁師										
日雇い労働	3		11	4						
米作農業	5043	428	2239	122	353	16	293	...	...	1028
ゴム農家							1			

Table 12. 1911の Samsams の職業センサス

	kotastar	Padang trap	Kubang Pasu	P.Langkawi	Yen	Kuala Muda	Baling	Kulim	Krian	Perlis
舞踊楽人等	6	...	...	...	...	4	...	2	...	3
政府職員										
モスクの役人										
Punghulus(首長)	1		...			1				1
僧	18	22	2	...	...	2	26	..	...	3
警官	4	1	...			1				
宗教教師										
学生										
校長						1				
商店主	64	12	22	1	...	1	10	3	...	15
牛車貨物										
象使い										
漁師	3			2			1			7
日雇い労働	1	1								
米作農業	2112	476	318	3	33	127	1299	43	...	758
ゴム農家								4		

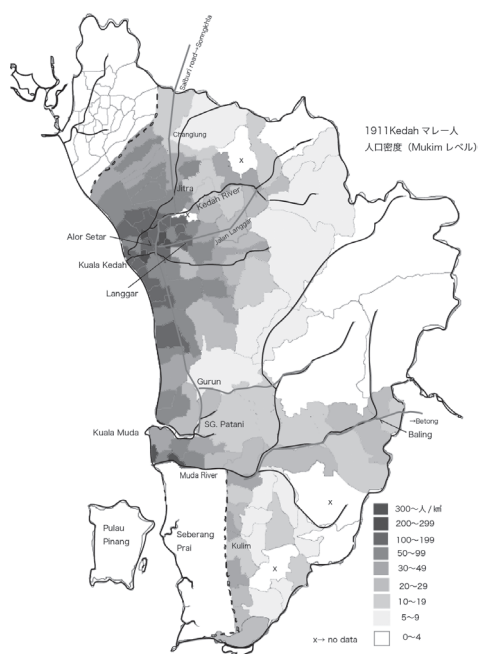
Table 13. 1911の Siamses の職業センサス

マレー語話者マレー人人口が卓越して多いことにもよるが、シャム語を日常言語としているサムサムとシャム人に、ほぼ官吏がおらず、ほぼ米作農家であることが特徴的である。

## 5. 視覚化した民族分類地図の試み

このセンサスではムキムレベルでの言語調査記録が記載されていないので、マレー人の中のサムサムの分布がわかりづらいのが残念であるが、表で示してきたものをクダー州に限った不十分なものではあるが、ムキムごとの人口密度（クダーの東部は山岳地帯である）を人数／面積で計算して視覚化を図った。

### 5-1. マレー人（サムサム含む）の分布図（Map 2.）



Map 2. マレー人の人口密度図

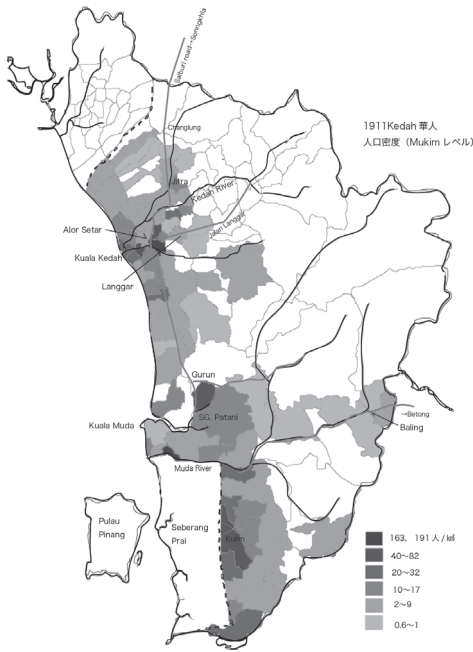
ここから明白にわかるのはマレー人（サムサム含む）人口の大半が沿岸部低地へ集中していることである。クダーは海岸線から19kmほどは低地であり、小規模ではあるがスルタンや重臣による運河開削が可能であった。特に1885年に構築された全長30kmに及ぶ、ワンマツザマン水路、及びそれに続くアロルチャンギリ水路（1890）、は自然河川や洪水を避けてやや標高の高い丘の麓に集中していた農村を、運河のほとりに新しく建設することができた。

沿岸部から19kmの内陸になると標高が15mを越え、若干高くなり現在では果樹園やゴム林などが目につくが、自然河川のほとりで、特に、パタニとの分水嶺から内陸を蛇行して海に至るムダ川は内陸の小河川の周りに盆地を作り、そこでの村単位の水路開削を可能にして水稻、陸稻栽培を可能にした。なお、クダーの交通においては1950年代まで河川交通による米輸送が主流であった。沿岸部の15世紀以来の開拓地（ムラユ型水田）に対して、クバンパスやプンダンの内陸部は新開拓地で自作農民による小規模開拓のタイ型（ナー型）水田である。

### 5-2. 華人の分布図（Map 3.）

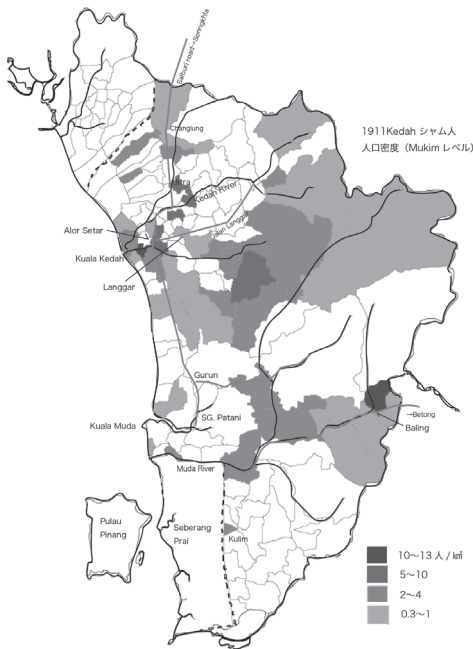
華人の分布をみると、アロースター、スンガイパタニといった商業地、都市部への集中と、





Map 3. 華人の人口密度図

### 5-3. シヤム人の分布図 (Map 4.)



Map 4. シヤム人の人口密度図

クダール南部、ペナン領、ウェルズレイ地方に隣接した地域に人口が集中している。ウェルズレイ地方は商人を引きつける場所であると同時に、1821-1842年にシヤムのナコンシータマラートがクダールに侵入、占領した30年ほどの期間に、反シヤム闘争やシヤム軍から避難したクダール難民が多数避難したところである。1842年以降、どの程度その難民がクダールの故地に復帰したかは不明である。しかし、商業地としての英領ペナン周辺に華人が集中するのは理にかなっている。

また、グルン (Gurun) の回りに集中して華人人口密度が高い所は、周辺の水田からの米の精米業者、商店、ゴム仲買い業者の集中がみられるところである。

マレー人と華人の分布と異なり、シヤム人の分布は人口が少ないので分布のスケール規模に留意していただきたい。

また、クダール東部の山岳地域はムキムの面積が広いことややいびつな印象は否めないが、上記のマレー人や華人との人口集中地域の差は歴然としている。

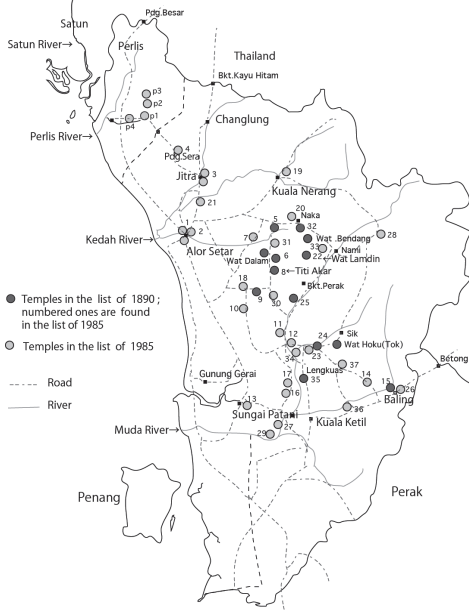
シヤム人は首都アロースター以外ではプンダンのパダンクルバウ周辺と、とバリんとムダ川のトカイ (Tokai) など内陸の川沿いに集中しているのが特徴である。

シヤム人の村落の存在のカギとなるのは、村落民の生活と行事に欠かせない上座仏教寺院である。

先に述べたように、シヤム政府が1890年と1892年にクダールの寺院リストと僧侶数を記録している。それをクダールの1985年に登録されている上座仏教寺院の中に位置づけるとこのようになった。

#### 5-4. 1985年までのクダー・プリスにおける上座仏教寺院所在地 (Map 5.)

この図にみえる○は1985年にマレーシア上座仏教寺院協会に登録されている寺院で、黒丸(●)は1890年と1892年のシヤムが作成した寺院リストの寺であり、1985年の寺のリストにも名前がある。



Map 5. 上座仏教寺院所在図

これを合わせてみると、以下の特徴がわかる。

シヤム人の殆どが農民であることがセンサスからもわかるが、シヤム人の居住地というのは内陸の河川沿いにある。2004-2007年にかけて筆者が行ったクダーの上座仏教寺院調査で確認したところ、歴史が古い寺ほど、河川に接している。この場合は、ムダ川とその支流の低地沿いに寺と人口の集中がある [黒田 2010. 黒田 2011]。

沿岸のマレー人と一種の棲み分けをしている状況になっている。なお、1991年の「シヤム語」話者、サムサム村落の分布調査の結果、サムサムの村落は一つはサイブリー道路沿いに集中し、もう一つはこの Pendang のシヤム人村落集中地域と重なる地域にあることがわかっている [黒田 1995]。

#### 考察

1911年のセンサスからわかることは以下でまとめられる。クダーにおける「シヤム語」話者は、ほとんど先住農民の注意を引かなかった人々である。その理由として、彼らの元の居住地から、彼ら「シヤム語」話者が移住してきたのは数世紀を経ながら移住してきたこと。米作農家が殆どではあるが、先住の沿岸のマレー人居住地域に割り込むことなく、内陸の小河川の流域に開拓村を作ったことである。

シヤムとクダーの関係が長いため、これらの「シヤム語」話者の存在は、19世紀半ばに華人が大量移民をし、華語中心のコミュニティを作った場合と異なり、先住者と大きな摩擦を生まなかったと考えることもできる。

クダーの「シヤム語」話者の存在はタイ南部の旧パタニ王国地域におけるマレー語話者ムスリムがタイ国の仏教的価値観と国家観の元での国民統合でタイ語や仏教的概念を拒否し、テロを含む長い闘争をしているのとまったく逆の「緩さ」がある。冒頭でのべたタイ国に残ったクダーの一部であるサトゥーン (Setul) 県ではタイ政府との摩擦は生じていない。サトゥーン

県のムスリムは「シャム語」話者であり、それはグラバウスキーがいうように「先祖の言葉を忘れた」のではなく、もともと南タイに「シャム語」を話すムスリムが存在していたからである。マレー人＝マレー語＝ムスリムという構図はいわば、近代になってナショナリズムの強調から作られた民族イメージであり、それはタイ人＝タイ語＝仏教徒というステレオタイプなイメージが無意味であることと同様である。

1911年のセンサスで明らかになった数値的な意味での「シャム語」話者は、「記録されなかった歴史的存在」が公的なアイデンティティの表明を求める近代国民国家体制の中で、それぞれの公的アイデンティティ表明を求める国からの試練をむかえることになる。

## おわりに

本稿は、著者が1991年から2004-2007年にいたる断続的な科研によるクダー州のフィールドワークによる歴史調査の経験を踏まえて、データの補正をしつつ、改めてセンサスを主役として書き出してみたものである。

B. アンダーソンが『想像の共同体』で指摘しているように、地図とセンサスは自国を目に見える形で把握できるものではあるが、同時に見たくないものを排除する、あるいは気づかないようにするという役目も負う。世界のほとんどの国境が隣国との政治的駆け引きや国内統合の結果である以上、地図やセンサスもまた一級の軍事情報でもある。

このセンサスでペナンの英国政府が意図したことではないかもしれないが、政治的な表舞台に出てくる支配層の記録と異なり、クダーという地域の姿を現地調査の経験を経た上で見直すとその内陸地の農民たちの姿は異なってみえるものである。

## 参考文献

Archanboulc c. 1957. "A Preliminary Investigation of the Sam Sam of Kedah and Perlis", *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* Vol. 30, No. 1 (177) 75-92, Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, (<https://www.jstor.org/stable/41503108>).

B. アンダーソン, 白石隆\_白石さや訳, 2007. 『定本想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』, 書籍工房早山, 東京.

Crawford, John, 1822(rep.)1987. *Journal of an Embassy to the Courts of Siam and Cochin China*, oxford Univ.Pres.Singapore.

Grabowsky, Volker, 1996. "The Thai Census of 1904: Translation and Analysis Malaya.", *Journal of The Siam Society* vol.84, part1, 49- 85.

黒田景子, 1995 「サムサムとシャム人－クダーにおける Thai-speaker 小史」, 『南方文化』, 22, 44-61.

黒田景子, 2010. 「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から (1)」, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』71号, 21-45.

黒田景子, 2010. 「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から (2)」, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』72号, 59- 98.

黒田景子, 2010. 「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から (3)」, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』73号, 27-58)

黒田景子, 2010. 「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から (4) (了)」, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』74号, 51-84.

Siam Treaty with Great Britain :File no.10883/32-38

Superintendent of Census, 1911." Report on the Census of Kedah and Perlis, A.H. 1329 (A.D. 1911), Penang.